

くものいと No.24

KU MO NO I TO

1998 AUGUST 10

関西クモ研究会
大阪府茨木市

くものいと 24 号目次

東條 清：関西クモ研究会採集会報告	1
西川喜朗：中国大陸探蛛行	4
山野忠清：滋賀県の採集会	10
坂口佳史：滋賀県の採集会	11
赤松史憲：初めての採集会	12
船曳和代：採集会の感想	12
『くものいと』の原稿を募集します	12
吉田 真：チーちゃんて誰や？	13
1998 年度行事案内	13
吉田 真：虫は不快か友達か？	14
吉田 真：プレ・シンポ「クモの文化論」が実現するまで	15
やさしい自然教室報告（くもをさがそう）	17
（京都科学読み物研究会の許可を頂き、機関誌 192 号 9-11 ページより転載 させていただきました）	
会費納入のお願い	20

関西クモ研究会 採集会報告

東條 清

期日：1998年6月7日（日）

集合場所・時間：JR 阪和線山中溪駅前午前11時

出席者：西川喜朗、山野忠清、田中穂積、加村隆英、清水裕行、船曳和代、坂口佳史、野嶋宏一、長谷川夕希子、河井安子、富永春樹（中1）、溝辺将史（中1）、東條清。

当日は晴天に恵まれ、中学1年の2名を含む13名が集まった。最初に選んだ地域は、大阪府と和歌山県の県境にある和歌山県岩出町境谷であった。一行13名は西川・山野・田中・東條の自家用車4台に分乗して途中の駐車地までいき、そこから徒歩で採集・観察を行った。ここは、山中川の支流である谷川を挟んで、南北から里山が迫っている地域で、昆虫類やクモ類の多いところである。

途中、クモの採集・観察をしながら橋の上から川魚（カワムツ）の泳ぐ姿や東條の実演によるツチガエルの催眠術（?）、実が赤く熟したユスラウメ・ナワシログミやまだツルばかりのスイカ畑などを眺めながら、楽しくクモ探しに熱中する。昼食後も採集・観察を続けたが、午後2時過ぎに境谷の方を打ち切り次の予定地域である大阪府泉南市堀河谷に向かう。

堀河谷では、堀河ダムで採集し、さらにダムに流れ込んでいる川に沿ってのぼる。しかし、時間も少なく途中から引き返したために、採集・観察したクモの種類も多くなかった。

その後、ダム周辺に止めていた車の近くに全員集合し、その成果についてまとめることになったが、総まとめについては、今日の会が和歌山中心であったので、東條の方でやれということになった。しかし、不明種や再度同定を要する種もいくらか出てきたため、それについては後日、参加者が東條まで連絡することになっていた。

後日連絡いただいた方々は次の通り：加村隆英氏（境谷6種）、田中穂積氏（境谷4種、堀河谷3種）、野嶋宏一氏（境谷11種、堀河谷8種）

なお今回、境谷の方で採集したものは、60種となったが、そのうち6種が東條のまとめている和歌山県クモ目録にないものであり、和歌山県のクモは7月現在322種となった。参加された方々に御礼申し上げます。

当日確認されたクモ

境谷 18科60種

- | | | |
|---|--|---|
| 1. ウズグモ科
カタハリウズグモ
ウズグモ | サツマノミダマシ
コガネグモ sp. | ヤミイロカニグモ
マツモトオチバカニグモ |
| 2. ユウレイグモ科
ユウレイグモ | 9. アシナガグモ科
オオシロカネグモ
コシロカネグモ | 17. エビグモ科
ヤドカリグモ |
| 3. ヒメグモ科
ツリガネヒメグモ
シロカネイソウロウグモ
トビジロイソウロウグモ
オナガグモ
アカミジグモ
コノハグモ sp.
バラギヒメグモ
ハイイロヒメグモ | ジョロウグモ (幼体) | 18. ハエトリグモ科
マミジロハエトリ
ヒメスジハエトリ
ウデブトハエトリ
シラヒゲハエトリ
チャスジハエトリ
ミスジハエトリ
アオオビハエトリ
ムツバハエトリ |
| 4. サラグモ科
ザラアカムネグモ
アシナガサラグモ | 10. ヒラタグモ科
ヒラタグモ | |
| 5. センショウグモ科
センショウグモ | 11. タナグモ科
クサグモ | |
| 6. カラカラグモ科
ヤマジグモ | 12. コモリグモ科
イナダハリゲコモリグモ
ウヅキコモリグモ
クラークコモリグモ
チビコモリグモ | |
| 7. コツブグモ科
ナンブコツブグモ | 13. ササグモ科
ササグモ | |
| 8. コガネグモ科
チュウガタコガネグモ
ヌサオニグモ
アオオニグモ
オニグモ
ギンメッキゴミグモ
スズミグモ
ゴミグモ
ヤマシロオニグモ | 14. フクログモ科
ヒメフクログモ
ヤサコマチグモ
オトヒメグモ
ヤバネウラシマグモ | |
| | 15. ワシグモ科
メキリグモ
エビチャヨリメケムリグモ | |
| | 16. カニグモ科
コカニグモ
コハナグモ
クマダハナグモ
ハナグモ
ニッポンオチバカニグモ
アヅチグモ | |

堀河谷 13科28種

1. ヒメグモ科
ヤリグモ
イワワキアシプトヒメグモ
2. サラグモ科
ユノハマサラグモ
3. センショウグモ科
ハラビロセンショウグモ
センショウグモ
4. コガネグモ科
チュウガタコガネグモ
ヌサオニグモ
アオオニグモ
オニグモ
ゴミグモ
ゴミグモ sp.
ヤマシロオニグモ
5. アシナガグモ科
チュウガタシロカネグモ
オオシロカネグモ
ジョロウグモ (幼体)
6. タナグモ科
クサグモ
7. コモリグモ科
ウヅキコモリグモ
クラークコモリグモ
チビコモリグモ
8. ササグモ科
ササグモ
9. フクログモ科
アシナガコマチグモ
10. アシダカグモ科
コアシダカグモ
11. カニグモ科
コハナグモ
12. エビグモ科
アサヒエビグモ
13. ハエトリグモ科
ネコハエトリ
マミジロハエトリ
アシプトハエトリ
アリグモ

中国大陸の生物を調べることは、日本の生物相の起源を知る上でも重要である。私は、1997年9月1日から10月12日に、「中国南部の洞窟性および土壌性動物の研究調査」に参加する機会に恵まれたので、その概要を紹介する。

(0) 調査の概要

調査地域は、図1のごとくで、6つの省にまたがった。

調査メンバーは、隊長の国立科学博物館の上野俊一博士と東京農業大学の大学院学生の岸本年郎さんと私の3名であった。3名とも大阪出身者だ。参加予定の名古屋女子大学の佐藤正孝教授はお体の都合でとりやめられた。

採集許可と標本の持出しおよび現地調査については、中国科学院上海昆虫研究所の尹文英教授と桂林市の岩溶地質研究所岩溶地質館の王福星館長のお世話になった。さらに、これらの手続きや現地案内は、王福星さんと成都の中国科学院国際学术交流中心の範挺さんの協力をえた。

調査期間の前半(9/3-9/23)は、主として洞窟動物の調査をおこなった。調査した洞窟はすべて横穴である。

後半(9/25-10/9)は土壌性すなわち地表性・地下浅層性の昆虫やクモ類の調査をおこなった。

調査は、文献などにより洞窟性動物の、記録のある洞窟や生息していそうな洞窟、そして林のよく残っている自然保護区などでおこなった。広西と貴州省では10人乗りのワゴン車を、四川省とその周辺では三菱パジェロのジープ(2台)を利用した。調査地から次の調査地までが遠く、車で2日かかる移動が、のべ7回あった。

宿泊は大都市ではホテル、ほかはすべて政府や県の招待所であった。

(1) 桂林地域(9/2-3)

上海から1時間ほどで着いた桂林の空港では、なんと、1年前の5月にはなかったのに、広いフロアでベルトコンベアーに乗ってトランクや荷物が出てきた。新装改装で広くてきれいになった、とばかり思っていたら、市街の西南方に新しく開設された立派な国際空港だった。ここで、王福星さん夫妻の出迎えをうけた。空港から新設の高速道路を通り、30分ほどで桂林市内に着いた。1990年に来た時に比べて、デパートやホテルが増え、道路もきれいになっていた。

翌9月3日、初日、桂林市から車で北へ1時間の、霊川の潭下太平岩(洞窟)に入った。洞口から少し奥に入って、鍾乳石の急な傾斜に階段状に切り込んだステップを、ロープをつたって10数メートル降りると、わずかに水流のある大小のリムプールの連続した洞床に着く。ここから記録された目のない洞窟性の小さなゲンゴロウを、金魚用の網やプランクトンネットで3人でさんざん探したが発見できなかった。洞内気温20℃、水温16℃であった。

つぎの2日間は、車で西部の巴馬へ移動した。途中、タワーカルストの尖峰群が何

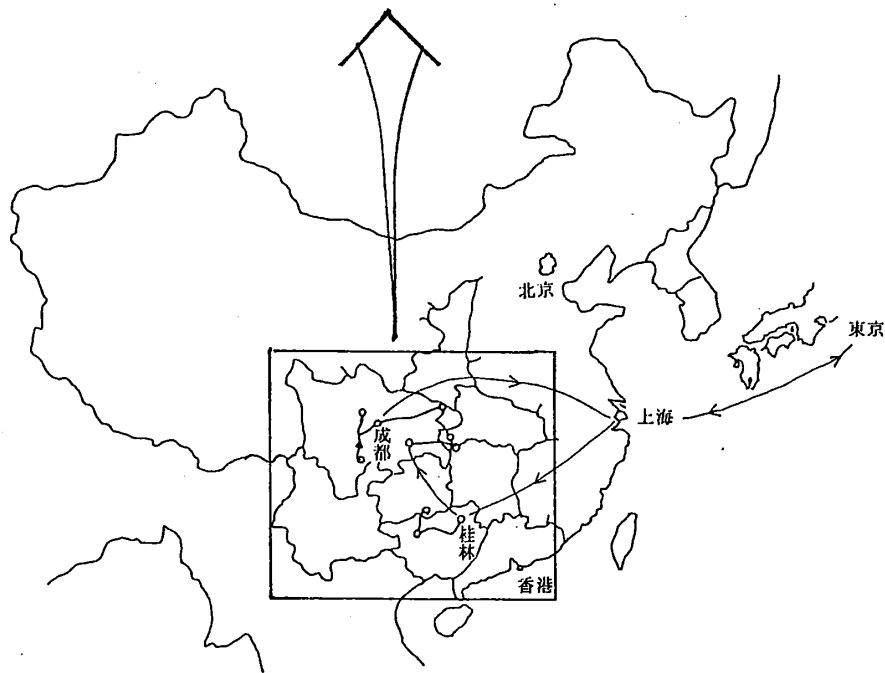
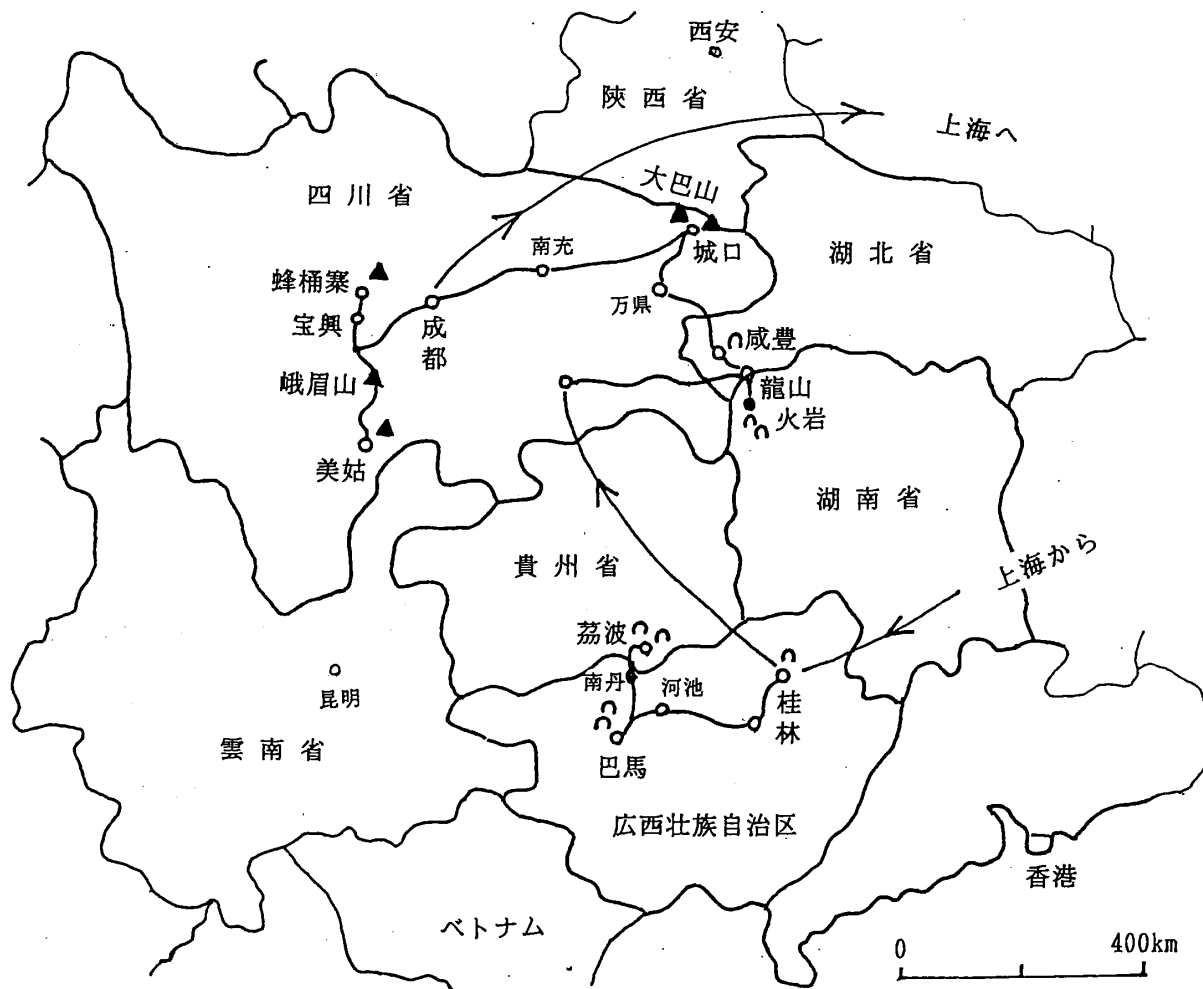


図 1. 調査地略図

度も見られる。急峻な岩山以外の、平地やゆるい山腹はほとんど水田や畑で、いい林はわずかしは見られない。

(2) 巴馬地域 (9/6-8)

イギリス隊が洞内測量をした文献(1990)などを参考に、洞内が湿っていて洞窟動物が生息していそうな5か所に入った。

最初の賈宝洞(Jia Bao Dong)では、せまい洞窟の途中で長さ10メートル足らずのサイホンのプールがあった。岸本君と私は、洞壁づたいに首まで水につかって歩き、そして数メートル泳いで渡って洞奥へと進んだ。奥には、白いカマドウマや白いワラジムシがたくさん見られた。そのほかに、アリズカムシやタナグモ科のクモを2, 3頭ずつ採集した。洞奥から記録のあるアシナガのチビゴミムシは発見できなかった。洞内気温は23℃ぐらいと思われる。帰りのプールは、初めから泳いだので、服や長靴に水が入ってふくらみ、恐ろしく進みにくかった。貴重な教訓だった。

ほかの洞窟(百慶洞, 前洞, 后洞)は、とにかく大きくて、洞口が直径10メートルから数10メートルあり、山の向う側までトンネルのように抜けている。これらの洞窟では、洞内気温も洞外よりわずかに低いだけで、白いワラジムシかダンゴムシ、茶色いヒメヤスデぐらいで、興味深い洞窟性の動物の種類は概して少ない。

畑の中を汗だくになって20分ほど行った所の洞窟で、調査を終えて出てくると、洞口の岩の上で、村のオバサンが、バナナの房を入れた竹のカゴを背負って待っていた。青くてゴリゴリしていたが、おいしかった。

(3) 荔波地域 (9/11-14)

巴馬から2日かかりで、貴州省南部の茂蘭国家級自然保護区の荔波地域に入る。1991年に、中国で初めてのメクラチビゴミムシを、王福星さんが採集されたのが、この天鍾洞である。その直後の2月に桂林で、私はそのアシナガの標本を見せていただいた。ただごとではないと思った私は、興奮をおさえながら、持出し許可をいただく前に、急いで全形のスケッチを描いて上野先生に送った。その記憶はまだ鮮明だ(S. Ueno and F. Wang, 1991)。

最初の夜に、この自然保護区科研科の冉景丞さんに、招待所の隣の棟の研究室で洞窟動物はじめ両生類、爬虫類そして昆虫やクモ類の標本などを見せていただき、話がはずんだ。私はクモの同定をいくつかした。洞窟の標本の中には拉梭洞のアシナガのチビゴミムシがあり、私たちを驚かせた。

天鍾洞(Tian-zhong Dong)は、下のホールの気温は、17~19℃、水温14℃と、条件は良かったが、王福星さんが1991年1月に調査された後で、下のホールの斜め上に通じる横穴が観光用に掘られ、その影響でホールの池の水位が下がり洞内全体も乾燥したという。そのためか、アシナガのチビゴミムシは1頭も発見できなかった。そこで、ジュース200cc入りの紙パックの箱を半分に切ったものに、バナナや腐ったチーズを入れて、以前に発見された鍾乳石の隙き間などにトラップをしかけたが、3日後には、カマドウマが食べに来ていただけで、チビゴミムシはかからなかった。この紙パックの箱によるトラップは、私の発案で、不規則な隙き間にも設置できるので、その後も重宝し、「西川式トラップ」と呼ばれた。

蝙蝠洞，天鍾洞のすぐ下の小さい穴。ここでは上野先生がハラフシグモの♂を採集された。床の粘土に小さい巻き貝がいる。洞外でトラップをかけたが，ハラフシグモもオサムシも採れなかった。（洞内気温23℃）

拉梭洞(La Song Dong)，長い横穴で奥に浅い池がある。淡色のヤチグモや白いオビヤスデ，アシナガの子ビゴミムシと新属の子ビゴミムシなどが採れた。洞外でのトラップはたいしたものは何も採れなかった。（洞内気温19℃，水温13.5℃）

飛雲洞，乾いた大きな滝つぼの崖つづちの途中に洞口がある。洞内は暑くて乾燥ぎみ。グアノが少しある。採集品なし。洞外の落葉層では，小さなセダカヘビ(?)を生け捕りして冉景丞さんに謹呈する。

冉さんは洞窟からの帰りに，民家で長さ1.5mぐらいの生きたコブラを受け取って，土嚢用の布袋に入れて，車の足もとに置いてうれしそうにしていたが，私たちは気が気でなかった。

紙廠洞，せまい斜洞で，洞奥の池には目のない白い魚が，口先で何かをさがすようにしながらゆっくりと泳いでいた。洞内気温20℃か，それ以下。体が冷えて下腹部がゴロゴロして困った。

董白洞，水田の中の小道を10分あまり歩いて，山向こうの水田の横の草むらの間に小さな洞口がある。奥が広くて深い。ヒゲの長い白いヤスデと白いヒメヤスデがいた。（下の段の奥で，21℃）

水撥水洞(Shui bo shui Dong)は，洞内にずうっと川が流れ込んでおり，洞壁の凹みに砂が水平にたまった所から，ハラフシグモを数頭採集した。ここでは，洞壁にアシナガの子ビゴミムシ(上野・岸本採)も採れた。（洞内気温22℃）

(4) 龍山・火岩地域(9/19-22)

荔波から2日かかりで桂林にもどり，次の日，飛行機で重慶へ，翌朝，パジェロで，小雨の中の悪路を，2日かかりで湖南省の龍山・火岩へ行く。洞内川の横に，レジャーセンターがあり，ここの賓館に泊まる。この付近は，フランス隊の調査報告書(1995)があり，これらを参考に，10か所近くの洞窟を調査した。

賓館の前の飛虎洞は洞口が広く，中にバスケットコートと仏像の祭壇がある。広いホールから長い梯子をかけてもらって上段の洞窟へ入る。この洞窟では，石の下から淡色のヤチグモとメクラチビゴミムシが2種採れた。

白岩洞は村から20分あまり登った所にあり，洞口から水が出ている。洞内は狭く，長さは50メートル足らず。洞床は砂の川岸で，大小の転石がある。生物採集なし。Gotobremus(?)も発見できなかった。

母猪洞は川添いの畑を10分ほど歩いた右岸に，3つ並んで洞口があり，洞内も3，4本の枝洞が左右に直交している狭い穴。洞内は乾燥ぎみ。

惹迷洞は入口から広さ高さともに数10メートルの大ホールで，その奥にループ状の枝洞や大きい枝洞が伸びている。ここでは木片の下からチビゴミムシが採れたが，他の虫はほとんど見られなかった。

鱧魚洞は洞内川を伝馬船で50mほど進んだ奥の観光洞である。淡色のヒメヤスデとカマドウマが多数いたが，他の洞窟動物はほとんど見られなかった。古い蛍光灯な

どのゴミが沢山散乱していた。

ほかに洗洛郷大井村の農道の横にあった洞窟は、小さくて洞内環境も乾湿がはげしくて良くなかった。。

(5) 咸豊地域 (9/23)

標高は約 600mの町。人民政府の招待所は、広い応接間の両側に3つの個室のついた理想的な宿舎だった。この町に着いて昼食後、二つの大きな洞窟に入る。

老硝洞 小学校の横から10分ほど山道を進んだ所にある。長い舌状に下る幅広い斜洞で、大小の岩がゴロゴロしている。地元の子供たちが石おこしを手伝ってくれる。淡色のヤチグモとチビゴミムシが採れる。(洞奥の気温17℃)

滴水洞 農耕地を通って急な下りを100メートル程下る。洞口は高さ数10メートルあった。洞床には大小の丸い石が多く、かつて川であった様子が良く分かる。ここでは、淡色のヤチグモ、メクラチビゴミムシが2種、小さな湧水の水溜りで、白いヨコエビが多数発見された。(洞内気温16℃、水温13℃)

(6) 大巴山地域 (9/26-27)

四川省東部の城口の招待所に泊る。省境付近には、いい林が残っている。

高楠の谷沿いにはトウモロコシ畑が多く、1,300m付近から上の急斜面に林が残っているが、採集には不向きであった。

城口の東の梁家弯唾口(峠)2,160mにはよい林と林床が見られた。峠の南北両側で土壌性のクモや昆虫類 *Paragonotrechus* sp. が採集できた。

(7) 宝興 (9/30-10/2)

パンダの保護区の基地がある蜂桶寨の招待所(標高1,500m)に泊まる。夜は少し冷える。ベッドの電気毛布が疲れた腰に気持ち良かった。隊長の楊本清さんはすごい酒豪だ。私は、最初の夜は飲みすぎて、標本の整理がまったく出来なかった。

保護区は南北50-60キロメートルはある。2,500m付近からシャクナゲが出てきて、3,000mの峠ではモミの林となる。山で調査中に、野生のヤクとレッサーパンダを見ることができた。また、療養中のジャイアントパンダにさわることができた。上野動物園のジャイアントパンダはここから送られたものだ。

また、保護区内の全山大理石の白い山で大規模な露天掘りが行われている。

(8) 美姑 (10/4-6)

美姑の町は標高2,000m前後。この町に日本人が来たのは、我々で2回目だということだった。西部の小涼山や、椅子唾口の峠、東部の大風頂生態保護区に自然林がよく残っている。東部の2,600m以上は亜高山帯で、一面の草原の所々に疎林やササなどのブッシュが点在している。いずれの場所も、よく湿っていて雲がかかることが多いようだ。もっぱら、石おこしやシフティングでまあまあ採集できた。

(9) 峨眉山 (10/7-8)

有名な信仰の山で、3,099mの頂上付近は常に雲がかかっている。麓から頂上までの参道には多数のお寺が建っている。全山見事な林が残っているが、生物の採集許可をとるのは非常に難しい。車道とロープウェイを利用すれば、頂上直下まで行けるので、参拝者や観光客が多い。上はかなり冷えるので、ロープウェイの駅では、ぶ厚い

コートを貸してくれる（有料）。頂上付近で石おこしやシフティングで、地表性のものがかなり採集できたが、予期したほど多くはなかった。

(10) その他の中国事情と印象

①土地——広大な国土。タワーカルストが美しい。どこまで行っても水田や畑が続いている。自然林はあまり多くない。各地で道路の改修工事がおこなわれ、若い女の人からおばさんまで男の人と一緒に働いている。

②気候——今回行った所は、同時期の大阪の気候とあまり変わらないが、晴れの日にはもっと暑い。しかし、標高 2,000m以上になると涼しくなり、天気の悪い時は寒かった（3,000m, 小雨で、車内で、7℃）。

③人情——たいへん親切で、人なつっこい人が多い。酒やタバコ好きの男の人が多く、しょっちゅうすすめてくれる。私たちが付き合った人たちは、あまり酒を無理強いしなかった。子供たちはカメラを向けるとすぐ逃げる。筆談も有効だ。

④車——運転手がかなり幅をきかせているらしい。チャーター代はかなり高額だ。車をよく飛ばす人が多い。雨後の山道は、土砂くずれがあつたり、路肩が弱くなっている事が多いので、時々落輪している車がある。

⑤買物——市場やスーパーマーケットがけっこうあり、たいがいの物は売っている。けれども、どうしても手に入らなかったものは、ガムテープ、希望のサイズのタッパー容器、ヘッドランプの豆電球。

⑥食事——安くておいしい。ほとんどの料理は油いためで出てくるので、不調の時は下痢に注意だ。四川料理はトウガラシをよく使う、特にサンショがとびきり辛い。おかゆ、そうめんを時々注文すれば、胃袋が安息できる。生野菜、生水は要注意だ。飲み水はペットボトルや紙パックのジュースを大量に買い込んだ。

⑦装備——泥んこの洞窟や沢、草むらなどでは現地調達の高靴が重宝した。長期の調査の場合は、日本から高靴を持って行った方が良いだろう。夜の室内作業には、単3電池のヘッドランプが便利である。

⑧洞窟——洞内気温が外よりわずかに低いだけの洞窟では、洞窟性の動物は少ない。メクラチビゴミムシや白いヤチグモのような、洞窟性らしい動物が見られたのは、洞内気温が20-23℃またはそれ以下の洞窟であった。

⑨ホテル——山奥の町にも招待所がある。ホテルや招待所では、湯茶のセットは必ず出る。スリッパもだいたい付いている。しかし、シャワー・トイレ・洗面所の水道など、どこか故障していることが多い。小型の石ケンは、すぐ無くなる。

⑩トイレ——どこへ行っても何とかなる。田舎へ行くほど、ドア無しや、低い仕切り壁の所が多くなる。下痢の時の厕所(ツェースォー)は、どの山道を走っても人が歩いているので、大変苦勞した。

◎クモは現在整理中。

引用文献

Gill, D., B. Lyon and S. Fowler, 1990. *Cave Science*, 17(2):55-66.

Ueno, S.-I. and F. Wang, 1991. *Elytra*, Tokyo, 19(1):127-135.

Expedition Xiangxi 95 (5/08 au 2/09/95). 湘西洞穴, 中法聯合探索。

滋賀県の採集会

山野 忠清

1997 度の関西クモ研究会の採集会は、滋賀県で年度内に 3 回行う予定でしたが、一度雨天中止となり、結果的には 2 回しか行えませんでした。1998 年 3 月 21 日に JR 南草津駅に集合し、車に分乗して目的地へという計画で、車での参加者を事前に 3 名と決めていました。しかし、この日は連休の初日のため名神高速が大渋滞で、私は 2 時間近く遅刻し、当初の計画を果たせず、他のメンバーに大変な迷惑をかけてしまいました。

当日は好天に恵まれ、前回には行けなかった草津川上流のキャンプ場内の溪流を遡上したり、それぞれが楽しい一日を過ごせたと思っています。また、河井さんの生徒さんで、動物が大好きという富永春樹君が参加されました。クモ好きの青年になれることを期待します。

採集リスト (1998.3.21 大津市上桐生)

ウズグモ科	アシナガグモ科	カニグモ科
ウズグモ	コシロカネグモ	ハナグモ
マネキグモ	アシナガグモ	ワカバグモ
ヒメグモ科	コモリグモ科	シャコグモ
オオヒメグモ	ウヅキコモリグモ	アサヒエビグモ
バラギヒメグモ	ヤマハリグモコモリグモ	ハエトリグモ科
アシプトヒメグモ	タナグモ科	アリグモ
オナガグモ	クサグモ	
サラグモ科	カミガタヤチグモ	
ユノハマサラグモ	ウスイロヤチグモ	
コガネグモ科	ヨドヤチグモ	
ゴミグモ	ヒメシモフリヤチグモ	

参加者 (敬称略)

赤松史憲、河井安子、坂口佳史、坂口貴志、富永春樹、西川喜朗、船曳和代、榎元敏也、榎元智子、山野忠清、吉田真

クモの採集会

坂口 佳史

春もたけなわとなってきましたが、お元気でやっておられることと思います。先日は採集会でお世話になり、有り難うございました。特に私の甥が飛び入りでやって来て懇切丁寧な指導をしていただいて、感謝しております。本人も「非常に参考になった。九州から来た甲斐があった」と喜んでおりました。

関西クモ研究会の採集会の前夜は、何やら嬉しくてウキウキした気分でした。理由はよく分かりませんが、若い頃に戻れたような気分だったのだと思います。当日は、20年前のキャラバンシューズを取り出して、あちこち錆びついた採集用具もそろえて、JR草津に向かいました。九州福岡で環境アセスメントの会社に勤めている甥が飛び入りでやって来て、一緒に採集行動できるのも楽しみでした。

午前10時、南草津駅前で吉田先生を見て「ここで良かったのだ」とホッとしました（実は私の地図には南草津駅は載っていません）。吉田先生とは、25年以上前の学生時代に「生懇会」というサークルで知り合い、これがクモに興味を持ったきっかけとなる「運命的な」出会いだったのです。

その後私はクモの研究をすることもなく（たまに写真を撮るくらい）、つれづれなるままに過ごしていましたが、去年の秋に田中穂積先生と偶然出会って、またこの「会」に復帰したのでした。

西川先生の車で、JR南草津駅から東南方向の山の麓（大津市上桐生）まで運んでもらい、ここからフィールドに出ました。セアカゴケグモ騒ぎの時は採集ではなく「駆除」、つまり殺すことが目的だったので、クモ採集などずいぶん久しぶりのことで、最初は張り切っていましたが、すぐ足が疲れてきました。結局5kmも歩いていないと思いますが、普段やり慣れてないことをしたので、トータルに疲れました。

参加した人たちも気さくな人ばかりで、気楽で良かったですし、何事にも興味を示す人たちばかりだったことも、これからの付き合いに楽しみを持つことができました。甥も、西川先生からタタキ網を中心に昆虫採集全般にわたって、ていねいな指導を受けることができた喜んでいました。

最後のところで各自の採集物を発表するときは、次々とクモの名前が飛び出したり、採集場所の正確な位置が発表されたりして、アカデミックな雰囲気を感じました。私はクモについて研究する気などありませんが、クモとは付き合いしていきたいと考えておりますので、これからもよろしくお願いします。

初めての採集会

赤松 史憲

初めての採集会でした。まだまだクモの名前を知らなかったので、採集しているときも名の知らないクモに出会ってドキドキしていました。他の人から見れば足手まといになっていたかもしれませんが・・

これを機会として私はただ今、家の庭や、家の周辺部のクモを見つけては名前を調べ、少しずつクモについての知識を深めつつある日々を送っています。

〈採集会のクモ〉

ヤマヤチグモ、ミドリアシナガグモ、アシプトヒメグモ、セスジガケジグモ、ゴミグモ、ワカバグモ、ハナグモ、アリグモ

採集会の感想

船曳 和代

「老眼鏡」を山に置き忘れ、山野先生を始め、たくさんの方々に迷惑をかけました。次回からは西川先生のように、紐でゆわえて手首からぶら下げるように心がけたいと思います。まったく不便で、つくづく年は取りたくないものです。

『くものいと』の原稿を募集します。

関西クモ研究会では年2回、会誌を発行しています。地方同好会誌の利点の一つは、いろんなことが気軽に書けることです。どんな些細なことでも結構です。案外それが、大発見につながるかもしれません。どんどん原稿をお寄せ下さい。

- ★ 論文、記録、感想、紀行文、質問など、何でも結構です。多少クモから外れても、まあ、いいとしましょう。
- ★ 原稿が手書きの場合は、編集で打ち直します。
- ★ 原稿をワープロで打つ場合は、B5サイズで印刷して下さい。編集作業の簡略化のために、MS-DOSのTEXTに落としたフロッピーを同封していただくか、e-mailで送っていただくと助かります。
- ★ 次回の『くものいと 25号』は1998年12月発行予定ですので、11月30日を切とさせていただきます。原稿の宛先は下記にお願いします。

吉田 真 〒525-8577 滋賀県草津市野路東 1-1-1

立命館大学理工学部生物地球科学研究室

TEL 077-561-2660 FAX 077-561-2661 e-mail: myoshida@se.ritsume.ac.jp

チーちゃんって誰や？

吉田 真

このごろ私はほとんど滋賀県の住人である。寝る時間まで入れれば京都にいる時間の方が長い。草津の大学まで毎朝りちぎに出勤し、帰るのは夜である。大学の近くには大きな本屋がない。京都の本屋が開いている時間には、私は京都にいない。

昨年暮れに、久しぶりに河原町をぶらぶらした。駈々堂に入り、めぼしい本を物色する。けちだからここでは買わない。大学生協に頼めば、1割引で買える。そこで私は、手帳に本のタイトル・出版社などをメモに取る。

マイケル・チナリーの「クモの不思議な生活」など、クモの本もある。斎藤慎一郎さんの「クモ合戦の文化論」もある。最近年のせいか、クモの生物学だけでなく文化にも少し興味がわいてきた私は、この本を買うことにした。しかしまあ、急ぐこともあるまい。他のめぼしい本をメモってからにしよう。クモの本など、なかなか売れないんだから。

1時間ほど本を見ながら店内をうろうろし、買いたい本をチェックしてからクモ・コーナーに戻ると、年輩のご夫婦と思われる2人がクモの本を物色している。「この本どーやる？」「チーちゃんに送ってやろうか？」

珍しいことがあるもんだ。私らクモ関係者以外でクモの本を買いたいと思う人に出くわす確率はゼロと思っていたが・・・私は横からぬっと腕を出し、本棚から斎藤さんの本を引き抜いた。お二人はぎょっとしたらしい。ちょっと悪いことをしたかなと思いつつ、私はその本をレジに持っていった。

レジで金を払っていると、その婦人が寄ってきて、「先生、クモを研究しておられるんですか？」という。何で「先生」と分かったんやろ、と思いつつ、「えー、そうです」。「失礼ですが、先生のお名前は？」「吉田といいます」。すると彼女は、「えっ、吉田先生ですか？失礼しました。私、伊藤千都子の母親です！」

びっくりするのはこっちも同じである。「えっ、すみません。どこかでお見かけした方々だとは思っていたのですが・・・」あとはどちらもぺこぺこお辞儀をするばかり。レジの女の子が笑っている。

伊藤千都子さんとは長いつきあいで、いまは結婚してアメリカに住んでいる。彼女の結婚式にも出たし、ご両親とも2、3度お会いしたことがある。私は本当に恐縮してしまった。全く、世の中は狭いと思った次第である。

98年度の行事のお知らせ

1998年10月4日（日）と1999年3月21日（日）に採集会を行います。JR 阪和線山中溪駅前午前11時集合です。例会は1998年12月13日（日）に四天王寺高等学校で開くことになっています。

虫は不快か友達か？

吉田 真

上村清さんから変な本が送られてきた。タイトルは「おじゃま虫のお通りだ」。拙著「スパイダーウオーズ」をその代わりに送った。上村さんは富山医科薬科大学医学部で寄生虫を研究されており、最近日本衛生動物学会の会長になられたらしい。3年前のゴケグモ騒動の折りに、「ゴケグモ・シンポ」でお目にかかったことがある。

ゴキブリ、シラミ、シロアリ、ドクガ、スズメバチ、イエバエ、ダニ、セアカゴケグモ、サソリ、ナメクジ… 人の嫌がる「おじゃま虫」が続々と登場する。面白いもので、上村さんと私の虫の見方は、正反対のようだ。上村さんにとってこれらの虫は、あくまでも駆除の対象である。私にとっては、虫どもは友達である。私もさすがに、セアカゴケグモやサソリと遊びたいとは思わないが、人間の場合でも、仲のよい友達からあまりつきあいたくない友達までいるではないか。

まず反感を感じてからこの本を読み始めたが、意外にもこれが面白い。これは上村さんの人徳であろう。シラミの項では、思わず笑ってしまった。小学生の頃、私たちは頭からDDTをかけられ、首筋から衣服の中にDDTを入れられた。アタマジラミやコロモジラミを退治するためである。国立感染症研究所では、上野の浮浪者から採集してきたこれらのシラミを50年間飼育している。人の血しか吸ってくれないために、職員が毎日腕を差しだし、吸血させているそう。アー、ヤダヤダ。

人につくシラミにはもう1種あり、ケジラミという。このシラミはアポクリン汗臭（何のこっちゃ）が大好きで、陰毛にしがみついて生活しているエッチな奴である。30年前には日本ではまれであったが、今では町中に広まっているらしい。買春ツアーによって東南アジアから持ち込まれたケジラミが恋人や妻を經由して広まったというから、恐ろしい。世の男と女がすべて陰毛を剃り落とせば、あわれケジラミは数日で絶滅するそう。

虫が友達と言ってはみたが、北陸の山村に大発生する「オロロ」の項を読んで、さすがにぞっとした。「オロロ」はイヨシロオビアブという大型のアブで、刺されると電気ショックのように痛みが走り、バンバンに腫れてくる。何千匹ものオロロに襲撃されて牛が谷に飛び込んだり、運転手が車ごと谷に転落したり、オロロが出現する朝と夕方に一斉に野良仕事をやめる村の習慣…上村さんが昆虫網をふるってみると、1時間で7000匹捕れたという。調査した川筋4kmで、もっとも多い日には50万匹が出現したという推定値がある！そういうと私も、滋賀県のガリバー村でアブの群に襲撃されたことがある。

本の裏表紙にこんなことが書いてあった：「人間にとって不快、有害（おじゃま）な彼らも、みな必要あって懸命に生きている。めったやたら戦ったり、ただ逃げ腰でいては、人間さまはどうていその難から逃れることはできぬ。ここはまず、じっくりと腰を据えて、彼らを見つめてみよう。されば賢明にも策も立てられるというものだ。」

プレ・シンポ「クモの文化論」が実現するまで

吉田 真

今年の夏に立命館大学で開かれる日本蜘蛛学会第30回大会で、市民向けのプレ・シンポジウム「クモの文化論」が開かれることになった。なにせ日本で、いやおそらくは世界でも初めての取り組みで、多数の市民が集まってくれるかどうかいまいち不安なところもあるが、関係者は大乗気で、準備に余念がない。ここでは、プレ・シンポが開かれることになった経過や、関係者の意気込みなどについて、この間飛び交った多数の手紙などを交えながら、書いてみたい。

仕掛け人は私である。2月12日に小澤実樹さんと斎藤慎一郎さんにとんでもない企画を持ちかけた：

大会の前日からくる会員を中心に何かできないか？市民や各地クモ同好会会員にも開放した「プレ・シンポジウム」。クモの文学・美術・音楽・遊び、ビデオ・演奏・展示、なんでもありの「クモの文化論」はどうだろう。

自分で焚き付けておいて我ながら怪しからんと思うが、このときの手紙にこう書いた：「こういう文系的なシンポを是非やってみないと、前から思っていました。ただし私はその時間は役員会ですので、出席できません。・・自分ができないのに人に頼むのもひどい話ですが、小澤さん・斎藤さんあたりで企画をしていただけないでしょうか？」

アツという間に返事が来た。斎藤さんの手紙（2月13日付）では「プレシンポジウムという構想にはもろ手をあげて賛成です。しかもクモの文化論とほうれしいですね。やりましょうヤリマショウ！」そして「咄嗟の思いつき」として、以下の企画をあげられた：

小澤さんのクモのデザイン展／映画（加治木町のクモ合戦記録映画、東映「ぼくのクモ合戦」など）／写真展（むかし展覧会をやるつもりで焼いた写真あり／水上勉さんの講演（「クモ恋いの記」などの作品あり）／クモ・グッズやクモの絵本の展示会／クモの玩具づくり／ぬいぐるみ寸劇・ホンチの喧嘩（出演：横浜いいじゃん会 or ホンチ保存会）／加治木町のクモ合戦の再現

「咄嗟に」これだけの企画が出てくるとは、ムムム！やはり斎藤さんはただ者ではなかったのだ。

小澤さんの手紙（2月15日付）もすごい。「拜復。ジャンプ金メダルとともに楽しいクモ便り拜受。・・ご提案の件、小生にとっては金メダル以上の興奮です。『クモの文化論』はビックです」

そこで、大会準備委員会としては細田みどりさんをコーディネーターとして、この企画を進めることにした。準備委員会としても全面的にバックアップするつもりではあるが、できないこともある。水上勉を呼べば、ネームバリューでたくさん人が集まるだろうが、ギャラはたぶん50万円、ひよっとすると100万円かもしれない。どこからか寄付を取ってこないとしても呼べない。また、8月下旬にホンチ（ネコハエトリ）の成体はいるのだろうか？

しかし、小澤さんも斎藤さんもそんなことは意に介さず、何人もの方と交渉して、どんどん企画を進めていく。すごい馬力である。5月の連休明けには、企画は完成してしまった！ここまで行くと、もう後には引けない。企画がよくても市民がこなかったらどうしようもない。私も、マスコミや教育委員会、自然保護団体などにこの企画を宣伝しようと思っている。

関西クモ研究会の皆さんも、是非聞きに来てください。この日の夕方には、市民向けの観察・採集会も予定しています。観察・採集会は地域の公民館の行事とジョイントすることとなりました。こちらにも是非ご参加ください。

日本蜘蛛学会第30回大会 プレシンポジウム

日時：1998年8月21日（金）13：00～16：00

場所：立命館大学びわこ・くさつキャンパス
フォレストハウス2F講義室

【テーマ】クモの文化論

クモの民俗と芸術

コーディネーター 細田みどり

基調講演 斎藤慎一郎「クモと日本人の付き合い ——クモを好きになる方法——」

クモは私たちにとってたいへん身近な生物です。でも、何となく好きになれないという人が意外に多いのです。そこで、日本各地に残る「クモ」の方言や、むかしは日常的だった子どもとクモの遊び、そしてクモ合戦のことなど、民俗史としてもとても興味深く、自然とクモが好きになるお話です。講師の斎藤慎一郎さんは、特にクモ合戦のことについて長く研究を続け、多くの論文と書物を刊行されています。

講演／パネラー


- 1 「日本と外国の国柄にみる、クモの玩具」…………… 笹岡 文雄
珍しく、楽しいクモグッズを紹介します。
- 2 「クモの網展」…………… 船曳 和代
クモの見事な網の標本は、まさに芸術品です。
- 3 「クモ・話の泉」…………… 須賀 瑛文
身近なクモ、文学に登場するクモ、諺や物語のクモのお話。
- 4 「クモ学資料に見る、クモの写真史」…………… 高橋 登
文献に見るクモの写真や図版をスライドで披露します。
- 5 「クモの形態デザイン」…………… 小澤 實樹
クモを象徴的にデザインし、クモを探ります。
- 6 「クモをテーマにした音楽」…………… 中島 はる
曲目〈蜘蛛の子〉（作詞：上野菊江、作曲：中島はる）
〈ピアノ曲：クモの糸のはしご〉（作曲：中島はる）
テープで音楽を鑑賞します。


6月「やさしい自然教室」報告 記録(大道)

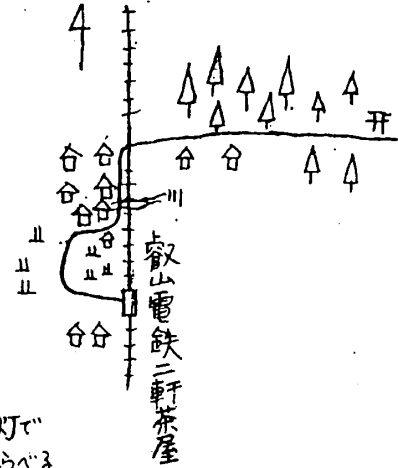
テーマ	くもをさがそう	場所	二軒茶屋周辺
講師	吉田真氏		
日時	1998年6月7日 10:00 ~ 12:00		天候(晴れ)
参加人数	大人10人・子供14人・計24人	担当	島崎

内容(集合場所、道順、観察・採集したもの、その数など...)感想


先生のお話 クモの採り方

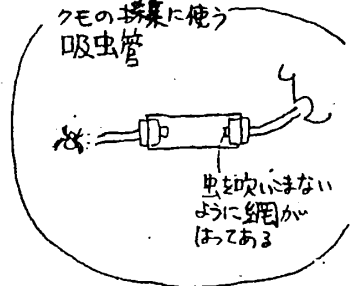
①  木の下に傘を上げて逆さにおき、上の木の枝をたたく。少々荒っぽいが採集できるクモの種類は多い。生態は観察できない。

②  生態を観察しながら採集する。網に霧も吹きかけ、網のはり方を観察する。霧が細かいほど、網がきれいに集まってくる。比較的上等な霧吹きがおすすめ。外液中電灯で照らしてみるのもよい。えさをほうりんごで反応をしらべるのもあもしろい。



見つけたクモ

・コカネグモ (倉庫の近く) 腹に黄色の横しまが多数ある。
網に「X」字状の模様をつくる。紫外線を反射し、虫を引きよせる役目があるらしい。
 ・チユウガタコカネグモ (林の中) オブ断所にはコカネグモとちがひ山手にはいたところにいる。腹に黄色のしまが1本あるが、その他の模様ははっきりしない。




・シラヒゲハエトリクモ (倉庫のかへ) 歩きまわるとみ、網をはらない

・クサグモ (生垣) 細かなシート状の棚網をはる

・ジヨロウクモ (生垣) 体長がミリの子どもで、色、形ははっきりなかった。垂直に網をはる

・ヤチグモの仲間 (石垣) 石の間に網をはる

・ジグモ (生垣の根元) 土の中から、地上にかけて管状の巣をつくる。
 巣の近くを虫が通りかるとかみついて巣に引き込む。

・アシブトヒメクモ (池) 葉のうら側に網をはり、卵を糸でくんでる

・サラクモ 皿状の網をはり、網の下にかかっている

・クサグモの巣にいそろうするチリソウクモ
網にかかった虫だけでなく、家主のクモを食べることもある

・ウスグモ (側溝の中)



満腹状態では 空腹状態では
直線状の模様 渦巻模様をつくるという研究結果がある

・ヒラタグモ ブロック塀にはりつくような巣をつくる

最後のまとめでは 全部で 34種類のクモが確認された。

この時期は子クモの時期であり、秋に比べておとなのクモを観察できるのです。

先日（6月7日）の観察会で出てきたクモのリストを送ります。

1998. 6. 16 吉田真

トタテグモ科

キシノウエトタテグモ

アシナガグモ科

コシロカネグモ

オオシロカネグモ

キララシロカネグモ

ジョロウグモ

ジグモ科

ジグモ

タナグモ科

ヤチグモの一種

クサグモ

コクサグモ

ウズグモ科

ウズグモ

ヒラタグモ科

ヒラタグモ

キシダグモ科

イオウイロハシリグモ

サラグモ科

アシナガサラグモ

ユノハマサラグモ

クスマサラグモ

アシダカグモ科

コアシダカグモ（脱皮殻）

ヒメグモ科

アシプトヒメグモ

オオヒメグモ

ヒメグモ

チリイソウロウグモ

イソウロウグモの一種

ハエトリグモ科

アオオビハエトリ

シラヒゲハエトリ

アダンソンハエトリ

マミジロハエトリ

デーニッツハエトリ

コガネグモ科

アオオニグモ

チュウガタコガネグモ

コガネグモ

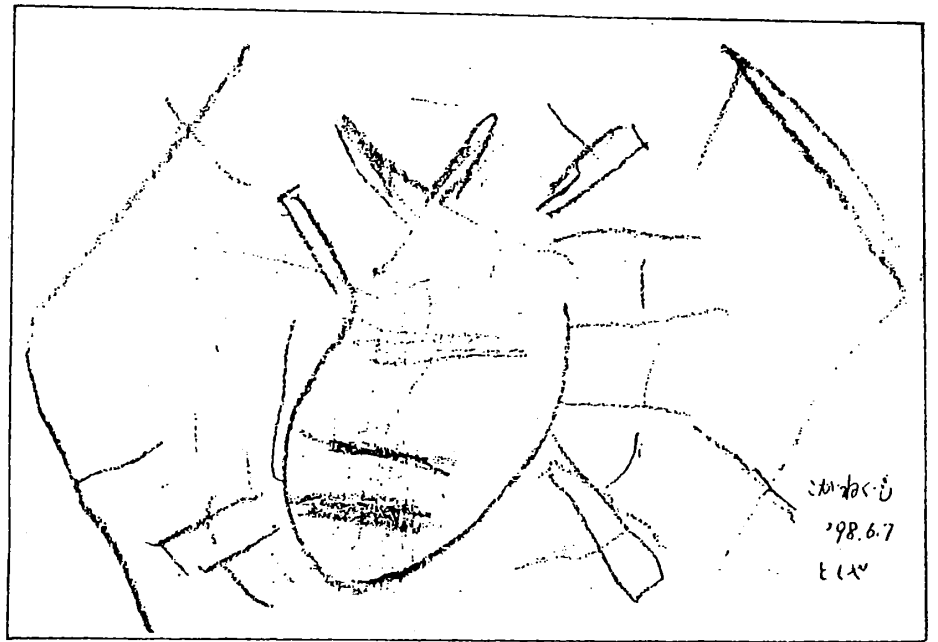
ヨツデゴミグモ

ゴミグモ

カラフトオニグモ（キマダラ型）

ヤマシロオニグモ

6月のやさしい自然教室「クモを探そう」
に参加した方からのおたよりの
紹介です。



かかぬくも
198.6.7
E14

山元 俊哉 くん (5歳)

※色がお見せできないのか残念ですが
画面いっぱいにか強く、カラーの「かかぬくも」です。

「自然教室」に魅力を感じて参加させて頂きました。
最初「クモとヤブクモ」というのを見て、クモねえ、
ちよとねえ...と思いつつ、何にでも興味のめる息子ひ
喜ぶんばら、ま、いひという程度のものでしたのです。
ところが、参加してみたら、私の方が夢中になって
しまいました。(四歳の息子には説明の面白さは判ら
ないにちうは、ちよとと優越感、ふふふ...)
何だかすごくゼータクは一時を過ぎて頂いた気が
します。有難うございまして。(次回も楽しみにして
おります。ヨロシク...) 大岡 雅枝さん

大岡 雅枝さん

提出が遅くなり申し訳ありません。
今回初めて参加させて頂きました。テーマが
「クモ」ということで、子供も私も、こわごわ
参加したので、終了時には、くもに
とても親しみが持てるようになりました。
普段見過ごしているものに、気づかせていた
だきました。特別な所へ行かなくても、身近な
所に自然の宝庫があるのだと思えました。
次回は川の川の観察ということで、こ水も
また楽しみにしております。

浅井 清子 さん

郵便はがき



元
俊
哉
子

初めての会に参加しました。家
かきねや種まきの甲、ふつふつと
見通してしまおうと、
たさ人のくもを飼ったのは、私に
と、も子どむにも、大まか
て、した。最初は、と、
設けました。たかかぬくもです。

山元 永子 さん

〈関西クモ研究会〉

会長 山野忠清

編集 吉田 真

庶務 加村隆英

会計 牧野達也

顧問 西川喜朗

くものいと 24号

8

発行年月日

1997年8月10日

発 行 者

関西クモ研究会 (代表 山野忠清)

住 所

〒567 大阪府茨木市西安威2-1-15

追手門学院大学 生物学研究室内 TEL 0726-43-5421

(内線 5113 西川研, 内線 5106 加村研)